

ブラジル独立 200 周年記念事業

オスカー・ナカザト氏講演会

ブラジルにおける日系人のハイブリッド・アイデンティティ

菊池 豪人

2022年6月30日、東京外国語大学プロメテウス・ホールにて、ブラジルの作家オスカー・ナカザト (Oscar Nakasato) 氏をお招きし、講演会「ブラジルにおける日系人のハイブリッド・アイデンティティ」が行われた。

1963年、ブラジル南部のパラナ州マリンガ市に生まれたオスカー氏は日系3世で、2011年に小説『ニホンジン』(*Nihonjin*) を発表し、これにより翌2012年にブラジルでもっとも権威ある文学賞であるジャブチ賞を受賞した。

本邦ではブラジル独立200周年である2022年、駐日ブラジル大使館と水声社が共同で、ブラジル文学の邦訳シリーズ (ブラジル現代文学コレクション) の出版事業を展開した (本稿を執筆している2023年1月現在もなお進行している)。オスカー氏の『ニホンジン』はシリーズの1作品として6月に刊行され、それに合わせ本講演会が開催される運びとなった。

この作品はブラジルの日系移民をテーマにし、1910年代に故郷に錦を飾ろうとブラジルへ渡ってきたヒデオや、その子供・孫たちにわたる3世代の家族の物語を描いている。一家をめぐるドラマは、1908年に笠戸丸に乗って神戸港を発ち、帰郷を夢見ながらもいつしかブラジルという土地に根を下ろし、やがて世界最大となる日系人コミュニティを形成していった移民たちの実際の歴史に重ね合わされている。

今回の講演はまさしく、この日系人をめぐる集団的な記憶や体験と、彼らのアイデンティティに関わるものであった。20世紀初頭にブラジルにやってきた日本人とその子孫たちの軌跡は、オスカー氏によると4つのフェーズに分けられる。曰く、第1期では彼らはコーヒー農園の小作農として過酷な労働と貧苦に耐え、ほとんど奴隷のような環境にあった。続く「迫害の」第2期では、第2次世界大戦やヴァルガス政権の国策などの影響で日本語教育が禁じられていた。第3期には多くのエリートが輩出され、社会・経済的に高い評価を受けるようになった。そして現代に続く第4期は、日系人がブラジル人として認められることを望んでいる時期だという。

同時期にブラジルにやってきた他のヨーロッパ系移民と比べ、日系移民はより大きな言語・文化面での困難を抱えてはいたが、世代とフェーズを重ねるごとにブラジル社会へと着実に溶け込んでいった。小説のみならず、講演でオスカー氏が語った自身の家族の思い出や記憶からは、初期に日本人として海を渡った世代と、コミュニティで日本的文化風習を維持しつつも実際の日本経験がない2世・3世の世代との間に、時に大きな軋轢があっ

たことや、一方で彼らのアイデンティティも、時間とともによりブラジルに適応する形へと変化していったことが伺える。そして、オスカル氏を含めた現代の日系人たちを考える上では、「ニポ・ブラジレイロ」であること、すなわち、日本とブラジルという二文化の“ハイブリッド”であるという認識が、殊に重要さを帯びているようである。

講演中に触れられた、そのような「ニポ・ブラジレイロ」たちをめぐる今日の社会問題も重要だと筆者は考える。オスカル氏は現在、パラナ連邦工科大学で文学および言語学の分野で教鞭を握っているが、かつての自身の研究で、ブラジル文学における日系人の登場人物や日本・日系人の描写が極めて少ない傾向にあることに気付き、落胆したという。20世紀前半の文学作品の日系登場人物に仮託される「主人の悪口を言う召使い」や、「帝国主義による領土拡大を表象する悪人」のイメージからは、当時のブラジルに住む人々にとっていかに彼らが異質な存在であったかが垣間見える。さらにそれ以降には、戦後の日系人や日本の活躍によって教育水準の高さや経済的豊かさと強く結び付けられた彼らのステレオタイプが現れるが、これもまた、ブラジル社会が日系人に対して向けてきた視線が、必ずしもその「実像」を捉えるものではなかったとオスカル氏は強調している。

オスカル氏が引き合いに出した「映画の配役がもらえない」と不満をこぼす日系の友人の例には、彼らニッケイたちが「ブラジル人として認められたい」という切望と同時に、初期の移民から1世紀を経てもなお、いまだ社会的包摂が十全ではない現状への苦悩が表れているだろう。「若いころは（日系人としての）自分の外見が好きではな」く、かつて日系人のアイデンティティを持つことに忌避感を覚えたというオスカル氏自身の経験もまた、日系人がブラジルにおける歴史的な“よそ者”としての後ろ向きなイメージを、時に自身で内面化してしまうことさえあることを示している。

普段から和食に親しみ、週末のシュラスコを楽しむ。あるいは、千昌夫を聴き、訪れたことすらない日本という「故郷を恋しいと思う」……日本とブラジルという全く異なる二文化間に生きる人々の在り方や、彼らが直面する問題を照らし出した今回の講演は、グローバル化が進んだ現代社会において、個人と“複数性を帯びるアイデンティティ”の関係を考える上で非常に示唆深いものだったと言えよう。総勢150名程度の聴講者の中には日本人学生だけでなく、多くの日系人、ブラジル人が散見されたが、質疑応答の場面ではそれぞれから質問が寄せられ、今回の講演がいかに国籍や立場を越えて関心を惹くものであったかが伺えるだろう。

本講演会は、冒頭で述べた駐日ブラジル大使館、水声社、さらに科学研究費助成事業研究「ブラジルのマイノリティ文学における複合性：交差する人種・ジェンダー・クラス」（基盤C、21K00432 代表：武田千香）、ならびに東京外国語大学多言語多文化共生センターの共催として行われた。最後にこの場を借りて、ご協力いただいた総合文化研究所ならびに国際日本研究センターに感謝を記したい。

日時：2022年6月30日（木）12:50～14:10

場所：東京外国語大学プロメテウス・ホール

言語：ポルトガル語（日本語への通訳あり）

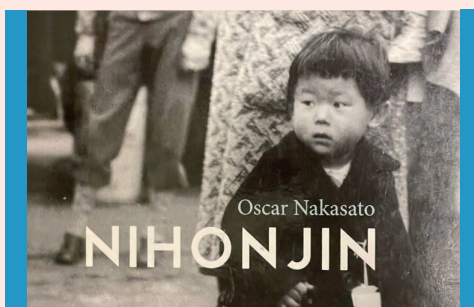
司会：武田千香（東京外国語大学）

ブラジル独立200周年記念事業 『ニホンジン』邦訳出版記念来日
「オスカル・ナカザト氏講演会」

Identidade híbrida do nikkei no Brasil

ブラジルにおける日系人のハイブリッド・アイデンティティ

『ニホンジン』
1908年6月18日、ブラジルのサン
トス港に、
781人の労働移民を乗せた一隻の船
「笠戸丸」が到着する。……
後に世界最大の日系人コミュニ
ティが
形成されることになるかの地で、
希望に胸を膨らませたヒデオ・イ
ナバタは、
いつか故郷に帰る日を夢見ながら、
農場オウロ・ヴェルジで身を粉に
して働くことになるのだが、……



一般公開
事前申込不要

オスカル・ナカザト著
『ニホンジン』
(武田千香訳)
ブラジル現代文学コレクション
ション (水声社)
2022年6月25日刊予定

「ニボ・ブラジレイロという境遇こそが私の本当のアイデンティティであること、つまり日本文化と西洋文化の影響を強く受けたハイブリッドな存在であることを発見したのです。(…)今では日本人/ブラジル人の弁証法こそがいまのオスカルを創り上げたということを知っています」(O. Nakasato)

2022年6月30日(木)

【時間】 12:50~14:10 (受付開始12:15)

【場所】 東京外国語大学プロメテウス・ホール(定員250名)
東京都府中市朝日町3-11-1 西武多摩川線多磨駅下車徒歩5分

【言語】 ポルトガル語(日本語への通訳あり)

【共催】 科学研究費助成事業 基盤研究(C)「ブラジルのマイ
ノリティ文学における複合性:交差する人種・ジェン
ダー・クラス」(21K00432)
東京外国語大学多言語多文化共生センター

駐日ブラジル大使館、水声社

【協力】 東京外国語大学国際日本研究センター
東京外国語大学総合文化研究所

※来場時に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ご
連絡先をご記入いただけます。

お問い合わせ:武田千香
Palestra6030@tufs.ac.jp



オスカル・ナカザト(Oscar Nakasato) 日系3世のブラジルの作家・1963年、パラナ州マリンガ生まれ。パラナ連邦工科大学教授。2011年に『ニホンジン』(Nihonjin)を発表、ペンヴィラー賞とニッケイ文学賞を受賞し、翌年2012年にジャブチ賞を受賞。長編小説にはほかに『二人(Dois)』(2017)がある。